

第五章 伊吹の涙

1.

翌朝、伊吹はすうくんのおかげで六時二十分に布団を出た。正確に言えば、目を覚ましたのはその一時間ほど前のことだった。一緒に並んで寝ていたすうくんが元氣よく起きて伊吹の上に乗っかってきたのが、およそ五時半だったのである。

絶望的な気持ちで着替えた伊吹がすうくと共にのそのそと部屋を出ると、ちようど従姉妹のほたるが、首から紙のカードを下げて歩いているところに出くわした。

「あ……伊吹お姉ちゃん。今日、早いんな」

「起こされた。もうダメだ」

「紅葉お姉ちゃんは？」

「あいつは地震が起きようが爆撃が来ようが、六時半にならないと目覚めない。ああ……眠くて死にそうだ……」

「ほな……一緒にラジオ体操行く？ ご飯まで、まだ時間あるし」

「ラジオ体操？」

「やったことある？」

「さすがにあるが……長らくやっていない」

ほたるはさつきから、囁くような小声で話している。別に朝だからというわけではなく、これがこの子のいつもの癖だった。小柄な上に、身の動きも控えめでこぢんまりとしている。

「目え覚めるよ……すうくんも行く？」

膝を曲げたほたるが話しかけると、すうくんはウン、と元氣よく頷いた。

伊吹はため息をついた。

しかし——朝の田舎道というのは、なかなか気持ちのよいものだった。

伊吹は深く息を吸い込む。日が昇って間がないためまだ辺りは薄暗いが、少し湿り気も含んだ空気はほどよく冷えて澄み切っているし、物音も近所の家から聞こえる、水道や皿の鳴る音ぐらいで、静かなものだった。遠く

の山から、かすかに蟬の鳴き声が耳に届く。

田畑の多い道を通って、三人は小学校へ向かって歩いた。白く射すような太陽の光が、伊吹の眼をすっかり覚ましてくれる。時折すれ違う近所の人と軽く会釈しながら、こればかりは東京よりもサンフランシスコよりもよいな、と伊吹はこっそり思った。

ふと、不思議に思った伊吹は、ほたるに尋ねた。

「ほたる。毎朝こんなことをやっているのか？ この地方の習慣か」

ほたるは大きな黒目がちの眼を真ん丸にした。

「え……たぶん、日本中でやっとなるよ。夏休みやし。お姉ちゃんやらんだん？」

「小学校の頃は、日本でもアメリカでも父親と暮らしていたから。全てアイツ基準で、世間の常識なんかどこにもなかった。それはともかく……ラジオ体操なんかちゃんと出来る自信はないし、たぶんこの子も出来ないぞ」伊吹は小学校のうちにアメリカに渡っているため、向こうではもちろんする機会がなかった。日本の体育の授業でラジオ体操を教えられたのはずいぶん前であり、しかも全くやる気がなかったので、ちゃんと憶えていない。

それから、伊吹はすうくんを見やる。すうくんはパジャマから着替えて、今は小さい頃みわが着ていた、Tシャツとズボンを身につけていた。徹底して女系である尾津野家には、小さい男の子用の衣服など一着も置いていなかったのだが、幸いみわはボーイッシュな格好を好むため、すうくんが着てもさほど不自然ではなかった。

そして、今日も朝から一向に手放さない假面かめんを、いまだに片手に提げ持っていた。

ほたるはにっこりと笑う。

「大丈夫やに。教えてくれるお兄ちゃんが来とるから」

「お兄ちゃん？」

「少年野球を時々教えとるお兄ちゃんが来とって、みんなの前で教えてくれとんの。優しいよ。結構、カッコイイし……」

少し頬を赤らめながら、ほたるはそう呟く。彼女は姉と対照的に、いつも可愛らしい服装を選んでいる。今は、清潔な白いワンピース姿だった。

よく似合ってはいるが、これで体操が出来るのだろうか、と伊吹は疑問に感じる。髪はロングのストレートで、時折風に揺れてなびいている。尾津野家の女の子らしい、細身の美少女だった。

そこで何となく、伊吹は訊いてみる。

「……ほたる。ほたるは、モテるのか？」

「うえええ？ な、なんで??？」

「なんとなくだ」

伊吹は素知らぬ風でそう応じた。

ほたるは困惑しながらも、何とかこう答えた。

「そ……そんなにモテへんよ」

「そんなにということとは、多少はモテるのか」

「えー……と。告白されたことはあるよ……二回、くらい」

俯きつつ、赤面したほたるは言う。小学五年生だというのにそういうやりとりをしている世界もあるのか、と伊吹は内心嘆息した。高校一年生である伊吹は、もちろん男子と付き合ったことはないし、告白されたこともないし、そもそも異性にまともな好意を持ったこともない。

伊吹は容赦なく疑問を追求した。

「なぜ、ほたるはモテるのだろうか」

「うえええ！ し、知らんよ……ほたるに訊かんといて」

そう言っつて、ほたるは両耳を塞いで目を瞑ってしまった。確かに当人に訊く問題ではないだろう。伊吹が腕組みして首を傾げていると、今度はほたるが尋ねてくる。

「せやったら……伊吹お姉ちゃんはどうなん？ モテるんやろ？」

「……私のどこにモテる要素があるのだ」

「美人やし、カワイイし、頭いいし、優しいし」

「仏頂面だし性格悪いしイヤミだしデコッパチだぞ」

ほたるの言葉に、伊吹は口を尖らせて返す。ほたるは眼を不思議そうに瞬かせた。

「好きな人とか……おるんやろ？」

「いるわけない。絶対いない。ありえない。ゾツとする。男なんてサルだ」

叩き返すように伊吹が言うと、ほたるはふうん、と呟いた。

「伊吹お姉ちゃんのこと好きな人、絶対おると思うけど……あ、小学校あつちやに」

ほたるの指す方を見ると、道を下った先に、古びたコンクリート造り二階建ての校舎があった。伊吹とほたるとすうくんは、そちらへ向けてのんびりと歩いていく。さつきからすうくんは、まるで遊園地にも行くかのように笑顔で飛び跳ねていた。

「……尾津野じゃねえか。どうしたんだよ」

子ども達が大勢集まった小学校の校庭に三人が着くと、そこにいたのは、きよとんとした表情の吉野だった。Tシャツに半ズボン姿である。

伊吹は露骨に怪訝な顔をした。

「お前こそ何をしているのだ」

「何って、ちっちゃい子にラジオ体操教えてんだよ。オレ少年野球のコーチやってるからさ。知ってるヤツ多いんだ。おいミヤマ！ 喧嘩すんな！」
急に吉野は離れたところで騒いでいる子を怒鳴りつけた。野球帽を被った男の子二人がびくりと縮み上がる。

「尾津野の方こそ何で来たんだ？ ていうか、一昨日大変だったんじゃねえのか？ 近所のおばさんとか言ってたぞ。賀茂寺のお嬢さんが事故に巻き込まれたとか、でも無事だとか……眼鏡も壊れてるじゃん。心配だったけど、悪いと思って昨日は電話しなかった。あと、この子誰だ？」

これだけのことを早口に尋ねてから、吉野はすうくんを見た。

今までは誰にでも割とすぐに懐いていたすうくんだったが、吉野に対しては珍しく警戒心を抱いているらしく、伊吹の後ろに隠れて、服の裾を握っていた。伊吹は面倒くさそうに答える。

「色々あったのだ。後で説明する」

ちやうどその時、向こうから「みなさんお早うございます！」というラジオの声が響いてきた。続いてやたら爽やかな、ラジオ体操の歌が流れる。伊吹は途端に慌てた。

「あ、いやその、来たはいいんだが、私はあんまり自信が……」

「出来ねえのか？ んじゃオレが教えてやるよ」

そう言った吉野は、伊吹の真正面に立つと、動きを一つ一つ説明し始め

る。

「まず最初は、両手をこうやって前に挙げて」

「ああ……」

伊吹は照れを隠しながら、吉野をちらちら見て、身体を動かしていった。すうくんはほたるの側について、見よう見まねで手足を振り回して遊んでいる。

ほたるは、そんな伊吹と吉野の姿を、じっと見つめていた。

2.

「……へえ、そういうことだったのか」

吉野がそう言ったのは、すでに昼前のことだった。伊吹と吉野とすうくんは今、警察署からの帰り道を歩いていた。すっかり日も高くなっていて、三人とも帽子を被っている。

ラジオ体操の後は、いったん伊吹も吉野も自分の家に帰って朝食を食べた。その後、伊吹は警察署へ行って一昨日の電車事故のことについて証言しなければならなかったため、朝早くからすうくんを連れて、町中へと出かけたのである。

誰か大人がついていこうか、という話も昨日からあったのだが、手の空いている人間が寺に誰もいなかった——というよりは、暇があつて車を運転できる匠雄も紀乃も、行きたがらなかった。それに、伊吹自身も別に一人で行ける、と思ったので、すうくと二人きりで行くことになった。そこへ、話をきちんと聞きたかった吉野が、付き添いに来たのだった。

「そりや大変だったな……ていうか、無事だったのが奇跡的だ。よかったよ、ホント。刑事には、どんなこと訊かれたんだ？」

「根掘り葉掘り、何でもだ。生きている証人が、私しかないんだから。とはいえ、話すことなど大してないのだが。気づいたら襲われていて、気づいたら運転手が死んでいて、気づいたらあの谷にいた。運良くそこから帰れた。それだけだ」

実際そうとしか言いようがなかった。襲ってきたのが大熊である、と嘘を吐いている以上、他に特別語るべきことも見あたらない。

担当の刑事は例の変わり者の道成寺刑事ではなく、しよぼくれた中年の男刑事だったが、彼の質問する内容も、書類に書き込むための通り一遍のものばかりで、どうもあまり真に迫ろうという気が感じられなかった。むしろ誘導尋問のような発言が多くて、伊吹は少々頭に来ていた。どちらかというと、事を荒立てたくない、むしろ、真相を表に出したくない、という風にすら感じられた。

「……変な話だな」

すると、吉野が呟いた。

「何がだ」

「列車が横転させられて運転手が一人死んでるような大事件だったら、普通血眼になって捜査するんじゃないか？ マスコミも大勢来そうなものだし。の割にはテレビでも、全国ニュースでは一回取り上げられて終わりだったぞ」

確かにその通りだ、と伊吹は沈黙する。そして、昨日の最初の聴取のときのことを思い出した。

警察は、伊吹が何かを話し出す前に、「熊に襲われたんだよね」と先に口火を切っていた。あの時は何となく流れで頷いてしまったが、考えてみればあの事故の現場を見れば、大熊なんかの仕業でないことは誰にだって分かるはずだ。伊吹は眉を顰めた。

——何かを掴んだ上で、あえて隠しているのか？

「ま。でもよかったよな。無事で何よりだ。んで、すうくんの方はどうなつたんだ？」

吉野はあっさりそう言うと、話題を変える。すうくんは朝とは打って変わって、もうすっかり吉野に懐いていた。伊吹が聴取を受けている間、吉野が面倒を見てくれたのである。

「うん……どうも昨日のうちに祖母あたりが一言連絡を入れていたらしく、簡単な話だけで済んだ。保護者が名乗り出てくるまでは、うちで預かっていてよいことになったらしい」

賀茂寺はこの近辺では、昔からそれなりに名が通っている。だからその家の生まれである祖母・翠は、多少のことなら容易に話を付けることが出来た。それは伊吹も以前から知っていたが、まさか警察にまで無理を通す

ことが出来るとは思わなかった。本来なら、警察が保護すべきところだろう。

「よかったじゃねえか。尾津野もこの子のこと、気に入ってるんだろ？」

吉野はすうくんの頭に手を置いて撫でる。すうくんは嬉しそうに眼を細めていたが、伊吹としては気が気ではない。あれが見つかってしまうかも知れない。

「あ、ああそうだな」

と言って、急いですうくんを自分の側へ引き寄せた。

不思議そうにしている吉野に向かって、ごまかしついでに話を振る。

「そ、それで、吉野はこれからどうするのだ？ 私は眼鏡屋に行つて、その後はもう家に帰るつもりなのだが」

「あー……実はさ、ちよつとだけ寄つていきたいところがあつて。よかつたら、眼鏡屋に行つた後でいいから、尾津野も一緒にどうだ？ 面白い話が聞けるかも知れないぞ」

「私も？ どこへ行くのだ？」

伊吹が首を傾げると、まあいいからいいから、と言って——吉野は、伊吹の手をさりげなく取った。

左手はすうくと繋いでいたため、残る右手を彼は握った。思わず伊吹はどきりとした。

男子と手を繋ぐなんて、伊吹の場合、幼稚園以来のことかも知れなかった。吉野としては何のつもりもない行動だったのかも知れないけれど、うぶな伊吹にとっては、どう対処してよいか分からない。吉野の手は野球のせい、まめが潰れて、ざらざらと硬い触り心地だった。

その時。

「ヤ——！！！！」

突然こんな甲高い大声が隣から飛んできたので、伊吹も吉野も驚いて飛び上がった。

声を出したのは——すうくんだった。

「????? お前、どうしたのだ？」

あまりに唐突なことに混乱して、伊吹も目を瞬^{しはた}かせるばかりである。すうくんは小さな口をへの字にして、両の手を握りしめて怒っている様子だった。伊吹たちの周囲を歩いてきた人たちも何が起こったのかと、啞然としてこちらを眺めている。

動揺している吉野は、伊吹に尋ねる。

「こ、この子、こんなデカイ声出すのか……？」

「し、知らない。大体、声を聞くこともほとんどないぞ。何だ、何がイヤなのだ？」

伊吹は腰を落としてすうくんに言う。けれどすうくんはそれ以上何も答えようとせず、ただ頬を膨らませて、じっと二人を見つめているだけだった。その眼差しはこの歳の子どもとは思えないほど強く、力があり、人を従わざるを得ないような心地にさせた。

結局何となく、伊吹と吉野は間にすうくんを挟み、手を繋ぐことなく次の目的地へ向けて歩いた。

ぼんやりと、ぎくしゃくした感じが二人の間に残った。

レンズ入れ替えると、フレームの歪み直しも含めて、眼鏡の修理仕上がりは三時頃になるらしかった。代わりの眼鏡もないので仕方がなく、伊吹は眼鏡なしで店を出る。少しの間なら何とかなるだろう。

それから伊吹は、吉野とすうくと一緒に喫茶『るーじゅ』へ立ち寄り、軽い昼食を摂る。そして家には、夕方までには帰る、と一言電話を入れた。

「それで」

食事を終え、リンと鐘の鳴る喫茶店のドアを押し開けて外に出たとき、伊吹は尋ねた。よく前が見えないので、さっきからずっと眼を細めたままである。結構疲れる表情だった。

「これからどこへ行くのだ？」

「渡邊教授の家だよ」

どうということもない調子で吉野は言い、伊吹は、ハア？と呆れ声で返した。

「何を言っている。教授は亡くなっただろう。行く意味がないではないか」

「教授の弟子も一緒に住んでるって言っただろ？ その人も大学で博士号取ってる、ちゃんとした学者なんだよ。もちろん鬼の研究にも詳しいって。民俗学者らしい」

鬼という言葉聞いた瞬間。

伊吹の心の中を、一昨日見たあの八本脚の化け物たちの姿がよぎった。

「お、鬼って……まだあの夏休みの活動計画は有効なのか？」

「続けるって約束しただろ？ もちろん、尾津野がイヤだったらやめてもいいけど」

伊吹のぼんやりした視界の中で、吉野は肩をすくめている様子だった。

伊吹としても、気持ちには微妙なところである。殺人事件の発見者というだけならまだしも、現実には得体の知れない化け物の起こした事故の当事者になってしまったのだから。これ以上、鬼だろうと妖怪だろうと、お化けと関わり合いになりたくないというのが正直なところだった。

——でも。

伊吹は隣に立つ、ミートソースを口の端に付けたすうくんの素直な顔を、ちらりと見た。

彼との出会い、そして、風呂場で手を掠めたあの「突起」のことを思い出す。

「……そうだな。鬼とは何なのか、まずは訊いてみたい」

今、自分はそれを、知らなければならぬという気がした。

3.

「あれえ？ 尾津野さんじゃない？」

渡邊教授の自宅前へたどり着いた伊吹たちがチャイムを鳴らそうとする時、どこからかそんな、気の抜けた女性の声が聞こえた。

伊吹はそちらを見ると、目を丸くする。

「……刑事さん、か？」

「どもども。道成寺刑事です。聞いたわよ。事故、大変だったみたいね。無事でよかったわ。ところでそちらは、カレシ？」

「にやっ!？」

唐突に妙なことを言われて、伊吹は変な顔で変な声を上げてしまう。道成寺刑事はすぐにあはは、と笑って調子よくこう続けた。

「ああ、吉野くんね。あの日とだいぶ表情が違うから気づかなかったわ。それで、その子が、森の中で見つけたっていう男の子？ ぼく、お名前は何？」

「すう」

いつも通りにすうくんはいいお返事をし、刑事は笑顔で、その小さな手を握ってみせる。すでに彼女は、伊吹の事情に詳しいようだった。

「……あの、刑事さん、何しに来たんですか？」

吉野が慎重な声でそう尋ねる。刑事は空とぼけた顔で応じた。

「え？ ああ、尾津野さんには前話したけど、『鬼』について専門家に聞いてみたいなーと思ったのよ。ほら、わたしの担当のあの連続殺人事件、『鬼』がキーワードって感じじゃない。『鬼』が何なのか分かったら、ひよっとしたらヒントが掴めるかも知れないと思って。だから教授のお弟子さんに、お話を聞こうかなー、なんて。尾津野さんもしかして、そういう用事？」

「……この人、前からこんなだったか？」

ふと、吉野が怪訝な口調で伊吹へ小声で尋ねた。伊吹は冷めた顔で答える。

「ああ、こんなだったぞ」

「ほらほら。喋ってないで、早く行きましょー」

刑事は機嫌良さそうにそう言うと、勝手にチャイムを鳴らした。

「……それで。どういったご用件でしょうか」

冷たい顔をした痩せた男は、座卓に茶を並べてからそう切り出した。伊吹たち三人は、回転灯籠や真新しい仏具の並べられた薄暗い居間に座って、硬くなっている。いつもと変わらないのは、すうくんだけだった。好奇心旺盛に、辺りをきよろきよろと見回している。

渡邊教授の弟子だという宇治川という彼は、一言で言えば悪魔のような風貌をしている。眼鏡がないので伊吹の眼にははつきりとしなが、黒い髪にこけた頬、隈のある眼の視線は鋭く、夏だというのに黒っぽい服装に

身を包んでいる。年齢はよく分からない。神経質そうに部屋に目を配り、それから伊吹たちを見据えていた。

道成寺刑事が、吉野を肘でつついた。

「……ほら、吉野くん」

「ふえ、オ、オレですか？ えーと……その、この度は、お悔やみ申し上げます。渡邊先生とは生前、少し電話で、お話もさせていただきました、あの日も、こっちの彼女と一緒に、鬼についてのお話を伺いに来たところでした」

「ええ、聞いていますよ」

「それでその、今日はですね……もちろん宇治川さんもお忙しいとは思いますが、もしよろしければ、その鬼についてのお話を、教えていただけないかと思ひまして……」

しきりに恐縮しながら吉野は話す。

「こんな時に唐突なお願いをして、本当にすいません。ただ、渡邊先生の事件のこともそうですけど、どうしてもオレは、鬼のことが気になって仕方がないんです。鬼って何なのか、つていうのが、自分の中ですっきりしない、というか……やつぱり、普通の妖怪とかとはちよつと違いますよね。今、鬼って何者なのかを知らないと、まずいつていうか、よくないような気がして……」

「悪くない視点ですね」

そう言った宇治川は、ふむ、鬼ですか、と息を吐く。それから、道成寺刑事の方を見た。

「刑事さんですか？」

「ふえ!? あ、はい、まあ……」

刑事はへこへここと頭を下げる。これでは、吉野の方がよほどしつかりした態度である。

宇治川は少しの間何かを考えている様子だったが、やがて、こう答えた。

「もちろん僕などは、渡邊先生ほどの学識は全くありませんし、そもそも専門は、山岳修験です。実のあるお話が出来るとも思えないのですが……ただ、僕としても、先生があのような形で殺されてしまった以上、色々と考えるとあります。僕の考えでは、連続殺人事件と鬼との間には、

ただのモチーフというだけでない、深い繋がりがある。もし刑事さんへ何かのお役に立てるのでしたら、お話しさせていただきましょう。それに……お若いお二人も、あんな現場を見てしまった以上、鬼についての知識を付けておいた方がよろしいでしょうしね」

「知識を？」

よく話の流れが分からず、伊吹は鸚鵡返しに尋ねた。すると、宇治川は頷いた。

「知識を得、ものを学ぶということは、闇を払い蒙を啓く、ということですよ。訳の分からないもの、意味の知れないものは不安を招きますから。隠野こくりののような鬼の郷さとに住んでいるのなら、なおさらです」

そう言うのと、宇治川は姿勢を正す。そして、薄い笑みを浮かべて問うた。「さて、お三方。鬼というと、何を思い浮かべますか？」

道成寺刑事は口元に指を当ててこう答えた。

「角、虎柄のパンツ、あとは、鉄棒かねぼうかな……」

「そうですね。一般に童話などに出てくる鬼の想像図は、もっぱらそう描かれています」

すうくんがおもむろに自分の頭に両手を持っていったため、伊吹は慌ててそれを止めた。

「現在『鬼』と呼ばれているものは、様々な概念が様々な根から複合されて出来上がったイメージなので、元を辿るのはなかなか難しいものです。先程刑事さんが挙げられた要素も、それぞれきちんと理由が存在するものです。例えば、角や虎柄というのは、陰陽道で鬼門と呼ばれたのが丑虎の方角、すなわち北東であったことに依ります」

「鬼門？」

刑事が首を傾げる。

「鬼が入りするとされる方角ですね。最も注意しなければなりません。ですから、古い都市や重要な施設の北東の方角には、鬼門を守護するために神社や仏閣が配置されていることがよくあります。一般の家でも『家相』という考え方があって、鬼門の方角に木を植えて守ったり、逆に水場を作らないようにするのは一般的です」

そして隠野こくりのにも北東に護りがありますね、と宇治川は言った。訝しげに

顔を見合わせた伊吹と吉野だったが、急に吉野が大声を出す。

「ああ、賀茂寺！」

「そうです。あそこは陰陽道とも修験道とも繋がり深い、大変由緒のあるお寺です」

それを聞いて、伊吹は何となく俯いた。反省したわけではないが、自分の家のことをそんな風に認識したことが、これまでなかったのである。

気にせず、宇治川は話を続ける。

「他にも、鬼が鉄棒を持っているのは、鬼の伝承が製鉄と大きな関係を持っているためですが、これは出自や他要素との関連性が極めて複雑なので省きます。ともかくそのように、鬼というのは古くから伝わる、数多くの起源を持っているのです」

「でも、鬼門が丑虎の方角になったから鬼がああいう姿に定まった、っていうことは、それより前はそういう姿をしていなかったということですね？」

道成寺刑事は小首を傾げて尋ねた。

「その通りです。『鬼』という漢字は元々中国から伝わったものですが、『鬼』はそもそも霊魂、死者の魂の帰ってきたものという意味でしかありません。これに大和言葉の『おに』という読みが加えられることで、現在の形になりました」

「じゃあ、日本語の『おに』というのは全く別物、っていうこと？」

「そうですね。よく言うのは、『陰』とか『隠』の訛った語であり、目に見えぬ怪異のことを指した、というものです。ただこれは、文献に残る以前の無文字時代の言葉を推測したもので、確かなことは誰にも言えません。いずれにせよ、元来そうした『何か』を指す言葉が在ったところへ、『鬼』という漢字が当てられた訳です」

さて、そこで古い文献での語の用法を検討してみましよう、と宇治川は語り出す。さながら大学の講義のようになってきて、伊吹の隣で吉野と道成寺刑事はすっかり身を硬くしていた。一方伊吹は、アメリカでは何度も大学で授業に出たことがあるため慣れたものだったが、こうした文系の学問は初めてで、新鮮に感じられた。

「最初に『鬼』の字に『おに』と読みが当てられたのは、『出雲国風土記』

においてです。ここに書かれた話では一つ目の鬼が現れて、田を耕していた男を喰らっています。これが奈良時代のもの。しかし一方で、平安時代に著された『倭名類聚』では、『鬼』の読みに『かみ』『もの』『すだま』と、いろんな言葉がかなり自由に当てられている」

「……それらはどういう意味なのだ？ 『かみ』？」

他の二人は完全に沈黙状態に入ったので、伊吹が質問することにした。

『かみ』というのはいわゆる『神様』の『かみ』ですよ。『もの』は『ものけ』と言うときと同じ『もの』で、一般に、寄る辺のない魂のこと。『すだま』というのはまあ、年月を重ねた木石に宿るとされる精霊ですね。アニミズム的な考え方です。古い日本の観念では、これらのものはそれほど明確な区別がなかったわけですよ」

そして中でも面白いのが『日本書紀』の記述ですね、と宇治川の話は止まらない。

『日本書紀』には少なからず『鬼』の字が登場します。ここでは『山に邪しき神あり、郊に姦しき鬼あり』と書かれています。この文脈だと、鬼は邪神と同系統のものと見なせますね。さらに、高天原より遣わされた神が『諸の順はぬ鬼神を誅ひ』と述べた部分もあり、『鬼神』という語が出てきます。まとめると、山中に存在し、正体が判然とせず、何ものにも従わぬ禍々しき『何か』、といったところでしょうか」

「何か、って言われてもねえ……」

今ひとつピンと来ない様子で、道成寺刑事は呟く。吉野は腕組みをして黙りこくったままだった。

伊吹は、すぐそばに座るすうくんをちらりと見やる。すうくんは大人しく座布団の上に座って、自分の假面を眺め、いじり廻っていた。伊吹の脳裏には、この数日中に見た様々な光景、列車を襲う奇怪な化け物、そして、四月に山中の社で見た腕の影が浮かび上がる。今聞いたような「鬼」の定義を受け入れるなら、あれらもまた、「鬼」と呼んでよいものなのかも知れない。

——いや、きつとまさしく、そうなのだろう。

珍しく直感的に、伊吹はそう考えた。

宇治川は一口茶をすすると、また口を開く。

「『おに』も『かみ』も、同じような言葉だったのですよ。また、『鬼』という字の読みは、その後も『おに』であったり、『もの』であったりして、長らく定まらなかった。得体の知れない存在、奉るわぬ神、世の渾沌を司る曖昧なもの。かつてこの日本では、そうしたよく分からない目に見えない力のことを、『おに』と呼んだり『かみ』と呼んだり、『もの』と呼んだりしていたのです」

想像できませんか、そういうものが、と言って、宇治川は肩をすくめた。「……渡邊先生は、各地の神社や聖地などを巡っては、そうした存在が未だ生きる場所がある、とよく喜んでおられました。確かにそうした『もの』は、この世に在る、と。そして、この隠野の地がその中で最も変わらざるを持ち続けている、とおっしゃって、この地を終の棲家にされたわけです」伊吹はそう聞いてふと、そんな変わり者の老教授の生前を思い浮かべてみた。

都会の大学で後進に囲まれるよりも、田舎の町で一人、本と共に暮らすことを選んだ民俗学者。けれど、頭に浮かぶのは、この家の二階で見かけた、彼の凄惨な死に様ばかりだった。考えてみれば、伊吹は教授の顔すら、まだ見たことがない。彼の顔には、歯をむき出した赤鬼の面がかかっていた。

あのシュールレアリスティックな遺体の姿ばかりが思い出される。

「うー……じゃあ、鬼っていうのは結局全部、そういう神様だか妖怪だかよく分からないような存在、っていうことですか？」

道成寺刑事が頭痛を堪えているような表情で何とかそう訊いた。すると宇治川は、そうとは限りません、と笑みも見せずに応じる。

「今話したのが、鬼の最も初めの形、原型アキタイプです。後にこの觀念に、中国道教の『鬼き』、仏教の邪鬼、修験道の鬼、民間信仰や習俗、伝承に現れる鬼が入り交じり、複雑化していきます。先程話した陰陽道も鬼神と関わってきますし、元来鬼が出てこなかった民俗事象にも鬼が登場したりします。節分の豆まきの鬼は、元々鬼ではなかったんですよ」

「じゃあ、何なのだ？」

「方相氏ほうそうし、で調べてみてください」

伊吹の問いに即答すると、自分で勉強するのもよいものです、と宇治川

はつれなく言う。伊吹は少し、むっとした。

「とにかく。こと日本のこうした伝承の元を辿るのは、難しいものなのです」

「……人が、鬼になる、っていうのは？」

その時――。

吉野が、そうぼつりと尋ねた。

伊吹は彼の、まっすぐな横顔を見る。

「よく言いますよね。昔話なんかで、鬼女とか、鬼になった僧侶とか。スナ様の伝承にも、鬼になった人の話が出てきたと思うし」

「まさにそれが重要なのです」

宇治川はそこで眼を見開くと、初めてにやりと笑った。

「ある時期から、人は鬼になるようになってたのですよ。般若というのも、憎しみの籠もった女性が鬼になった姿。執念深い僧が鬼になる話は、『古今著聞集』にあります。当地の宿禰スヱの伝承に現れるのも、おそらくこの類でしょう。もちろん仏教説話として、人を戒めるために作られたお話という部分もありますが……そればかりでなく、人は鬼になるものなのです」

恐らく道成寺刑事が話していたのも、こうした意味での鬼だろう。殺人「鬼」。人が鬼になった姿。伊吹は口を噤み、話を聞いている。

すうくんは興味なさそうに、畳の表面を撫でて遊んでいた。

「怨み、妬みといった邪心を持った高貴な人間が鬼になる一方で、盗賊や稀代の悪党といった人々もまた、鬼に成り果てていく。生まれや生き様は問題ではない。道を外れた者、弱く愚かな者、世に生きる場所を失った者。誰であろうとそうなってしまったが最後、人ではいられなくなるのです。生きる場所はないが、かといって死ぬ訳にもいかない。そんな二律背反に苛まれたとき、人は、人を辞めることで力を得る。絶望と渾沌の中、『おに』であり、『かみ』である『何か』になる……そしてようやく、自らの本源へと目覚める」

――でもね。

僕はたまに思うのですよ、と宇治川は皮肉な笑みを浮かべた。

「そちらの方が、鬼である方がむしろ、人らしい人なのではないか、と。世の多くの人の方こそが縛られ、力を失っているのではないかと。古く、山野の『もの』たちの力を知っていた人々は、今よりずっと自在の境地で、自然の中に生きていたのではないのでしょうか。実際、鬼になった人の伝承が生まれるようになるのは、中世以降です。封建的な社会の制度が整い、人の生き方は一つに定まっていくな。『正しい』『まっとうな』生き方が存在するようになる。他方、『正しく』『まっとうに』生きることの出来ない人々は、硬直化し爛熟していく社会の中で、暗部へと転落し、苦しみのたうつことになる。そんな決まり事がなかった頃は、思い悩むことなど何もなかったというのに。そうして最後、ふとした瞬間に、彼らは軛くづを解かれる。解放され、古い『もの』の力を手にし……鬼となり、世を再びの渾沌へと導こうとする」

宇治川は目を細め、そしてこう言った。

「つまり、この世が鬼を作り出していくのですよ」

「逆に言えば……本来人は皆、鬼だということ？」

不意に道成寺刑事が、珍しく鋭い声でそう言った。

「世の中という軛くづがあるから人は人でいられる、それが失われたとき、人は元の姿に戻る、と？」

「ふふ。性悪説に過ぎますかね。何にせよ、刑事さんには失礼な話でした。今の話はただの僕の意見、一つの考え方ですから、気にしないでください。ただ……」

宇治川は、視線を落とす。

「かつて人が多く『鬼』になったのは、世が荒廃し、人の生きる道が失われた時でした。だとすれば……規範や正統性が飾りだけのものになった今のような時代こそ、また再び、人が鬼になっていくのかも知れませんね」
彼はそう言って、長い話を結んだ。

「……まあ、この地方では鬼は山のお社に封じられているから、安心してしようが」

「おい。封じた人の子孫。憶えたか？」

そこで吉野が、伊吹に向かって要らないことを言った。

伊吹は目をそらす。

「……言われなくても、忘れるものか」

「子孫？ というと、そちらのお嬢さんは、賀茂寺の方ですか？」

確か以前お寺に伺ったときにはお見かけしませんでした、と宇治川は首を傾げる。

「あ、いや、よく似たお嬢さんはいたかな。髪が長くて、おっとりとしていましたが……」

「あれは、私の双子の妹だ」

伊吹が不承不承そう答えると、宇治川は初めて、僅かに驚いたような表情を見せた。

「すると……貴女は、黒塚教授の娘さんですか」

その言葉を聞いた瞬間――。

伊吹は、眉間に深く皺を刻んだ。

気分が、ひどく悪くなる。

「やあ、気づきませんでした。これは失礼。お父様とは渡邊先生も親交があつて、僕はまだお目にかかったことはありませんが、ご著書は何冊も拝見していますよ。素晴らしい、世界的な作品ばかりだ。よろしければ今度、ぜひお父様とお話でも……」

宇治川はまだそう饒舌に話していたが、どうにも耐えられなくなった伊吹は、そこで席を蹴るように立った。

「おい、尾津野!？」

背後で呼びかける吉野も、ぽかんとしているすうくんもその場に残し、伊吹は無言のまま居間を一人出る。廊下を足早に過ぎて、そして玄関から、家の外へと飛び出した。

途端に夏の強い日差しと、蝉の鳴き声に包まれる。

胸がむかついて、吐き気がした。

――聞きたくもない名前だ。

伊吹は、歯を固く食いしばった。

4.

「尾津野！ おい、待ってって！」

後ろから追ってくる吉野の声に振り返ることもなく、伊吹は強い日の射す田舎町の細道を、全力で駆けた。人通りも稀な家並みには、ただ蟬の鳴き声だけが響いている。眼鏡なしでは周りに何があるのかあまり分からなかったけれど、気にせず走り続けた。

しかし普段から走り慣れていないので、伊吹はじきに息が切れてくる。ちようどその時、道の脇に、静かに影の広がる涼しげな竹林を見つけた。伊吹はそこへ、足を踏み入れる。たちまち心地よい竹の薫りに包まれて、そつと息を吐いた。そうして伊吹は、辺りを改めて見廻す。

そこは——神社のようだった。

真っ赤に塗られた鳥居が、竹林の中にくくつもいくつも、合わせ鏡のように立ち並んでいる。そばには達筆の漢字が記された白い旗が掲げられていて、そしてその奥には、小さな社があるらしく見えた。狐の石像が二つ、横並びに据えられている。竹の葉を通した緑色の光が石畳に射していて、鳥居の赤と対照的だった。

伊吹は汗を拭うと呼吸を整えながら、そんな光景に見とれていた。眼鏡がないと、それらもぼんやりとしか見えないけれど、でも関係なかった。

印象派の絵のように曖昧な情景の方が、今の伊吹の気分からすると、よほど嬉しかった。風がそよそよと抜けて、汗に濡れたシャツが心地よい。伊吹以外、誰も人がいる様子はなかった。

その時——。

ふと、どこからか視線を感じた気がして、伊吹は辺りを見回した。

おかしな話だった。狭い神社の境内に、動く人の姿は見あたらない。眼鏡がなくても、それぐらいは分かる。それに伊吹は、誰かの視線を感じる、ということも今までなかった。別に誰かが見てきたからといって、見られた側が心配だけでそれに勘づく理化学的な根拠はないはずだ。眼差しを感じるというのは、受け手の側の思いこみに過ぎないだろう。頭では伊吹も、そう思う。

それなのに。

胸がざわざわする視線が、どこからか自分に向けられていた。

理屈以前の感覚として、はっきりと分かる。

何かに、見られている。

——なんだ。

伊吹は竹林の中に、立ちつくした。

——これは。

「尾津野！」

そこでもうやく追いついた吉野が、伊吹の後から駆け入ってくる。

それと同時に伊吹は、糸が切れたように視線を感じなくなった。

「どうしたんだよ急に！」

険しい表情をした吉野は、伊吹の側までやってくるなり、そう言った。

ふっと我に返った伊吹はしばらくの間、きよるきよると周囲を見渡していた。が、すぐにまた再び、さっきまで自分が何を不快に感じていたかを思い出す。そして、唇を噛んだ。

——黒塚教授。

その言葉が甦る。

あの男の顔が浮かぶ。

あの男の声を思い出す。

逃げようのない気持ちに囚われる。

「なんか……あつたのか？」

伊吹の様子に気づいて少し優しい声になった吉野は、伊吹にそう尋ねた。

伊吹は、顔を背ける。

「……私は、父親のことが嫌いだ。それだけの話だ」

伊吹はそう呟くと、口を固く噤んだ。

何も答えたくない、という意思表示のつもりだったのに、吉野には通じなかったようで、すぐに彼は、次の問いを投げってきた。

「嫌い？」

「……うんざりするほど嫌いだ。もう顔も見たくない。どうしようもなく下らない、俗物だ。気色が悪い。思い出すだけで腹が立つ。そういう奴の名前を出されたから、あの場所にいるのが耐えられなくなった。まだ聞きたいか？」

「黒塚教授、って言ってたよな」

伊吹は話を終わらせるつもりだったが、しかし吉野は平気で、そう

続けてくる。

きつい眼で睨んでやったが、吉野は淡々とした表情で、伊吹を見つめていた。

伊吹はふん、と鼻を鳴らした。

「……黒塚春臣。父は、コロンビア大学の人類学教室に勤めている。文化人類学の研究では世界的に著名、と言っているだろう。専門はアフリカのある部族で、毎年何ヶ月かはそちらへ渡って、研究活動をしている。大学での講義はいつも盛況で、専門外の学生もかなりの人数聞きに来ている。著書が入っていない図書館など、世界中どこを見てもない」

「大したもんじゃねえか」

「そこはな。それだけだ。それだけの人間なんだ。それ以外の部分は救いようもなく下らない、俗物なんだ。例えば……こんなことがあった。日本に来たとき、思想系の雑誌で父の対談企画が組まれた。父の名前を前面に押し出した企画で、悪くない話だと思っていたのだろう。それなりに嬉しそうにしていた。ところが、東京の私の家に編集者がやって来て、対談相手がまだ准教授だと分かった途端、ヤツは痲癩を起こしだした」

「え？」

「自分の相手として役不足だ、と思っただけ。連絡の途中でミスがあったので、肩書きから『准』が外れていたのだ。もちろん学者としては実績もある申し分のない人だったのだが、あの男は彼女の肩書きだけに執着したわけだ。自分が残す対談が、相手のせいで下らないものになりかねない。後世の名に傷が付く。どうしてくれるのだ、と言って、私の目の前で編集者を殴った」

「……」

「彼女が来た後は、フェミニニストぶってにこやかに会話していたのだが。他にも、電話で部下の学者を呼び出したと思ったら、丸一日連れ歩いて財布代わりに使う、自分の話を一回聞き逃したからと、話も聞かずに研究室助手を首にする、国際学会に泥酔して現れる。私の目の前でもこんなやりたい放題ばかりして、平気であるのだ」

「……自分の名前を大事にしてる人が、酔っぱらって学会に行くのか？」

「自分の能力なら酔っているぐらいでちょうどいい、と思っただけ。何

が一番腹立たいといつて、それが事実だから手のつけようがないということだ。これだけのことをしていても、大学はアイツを手放す気にはならない。学会も、アイツを無視するわけにいかない。研究成果が素晴らしいからだ。打ち出す理論はどれもこれも見事だ。間違いなく、人文科学の歴史に名を残すだろう。残念ながら、それは事実なのだ。生み出すものはどれも拔群だから、それなりに扱わざるを得ない。だから、アイツはなおのこと増長する。もう五十に近いあの身勝手な男を止められる者は、どこにもいない」

ヘドが出る、と伊吹は石畳を強く蹴った。こんなことを吉野に話すつもりはなかったのに、一度口に出すともう止まらない。

「私が一番イヤなのは、アイツと血が繋がっているということだ。間違いないくあんなくでなしの子どもであって、誰よりもその『才能』とかいうものを強く受け継いでいるのが自分だということが、もうどうしようもなくイヤなのだ。抵抗したくても、どうすることも出来ない。たまに学者に会うと、最後にはああやって父のことを訊いてくる人間が出てくる。文系でも、理系でもだ。父から少しでも離れたくて、物理学を専門に選ぶように思ったのに」

「悪かったな、無理にあの、教授の家に連れて行って……」

吉野はほつりと謝る。伊吹にはそれがひどく的外れな言葉に感じられて、余計に腹が立った。

「悪かった？ 何がだ。悪いのは全部あの男だ。あんなヤツなのに、未だにたまに父親面して連絡してくることがある。全部無視している。結局、自分の自慢話か、自分の功名心のために私を呼び寄せようとしているか、どちらかなのだ。自分の娘に人とは違った才能があるようだ、と分かった途端、アイツはテレビ局だの出版社だのに掛け合って、自分の名前を売るのが利用しようとしていた。おかげで小学生の間はずっと、その手の訳の分からない取材の相手をするのに時間を費やした。多少落ち着いたのはアメリカで中学に行つて、断り方を覚えてからだ」

せっかくだからこれも言っておこう、と伊吹は向き直り、吉野を見据える。

伊吹の眼は充血して赤くなっていた。小柄な身体は怒りに震え、まるで

怯えた獣のように見えた。風が吹き、竹林が揺れ、葉がざつと音を立てて激しく鳴る。伊吹の髪が乱れた。

「私と紅葉が双子だというのに徹底して別れて育てられたのを、変に思ったことはないか？　これも、あの男の差し金だ。自分から遺伝した才能が、一方にはあり一方にはどうやらなさそうだと気づいたとき、あの男は、なさそうな方への興味を失った。紅葉を妻の田舎に押しやり、私だけを手元に置けるように手筈を整えた。私を手元に置く方が、自分にとって得策だからだ。それからあの男は、親類や知人などの関係する人間の心情や考えをも、自分に都合がいいように調整し、私や母が抵抗できないような環境を作り上げた。つまり、『伊吹と紅葉が別れて育ち、伊吹はアメリカで、紅葉は日本の田舎で暮らす方が、皆が幸福になれるのだ』と思いこませたのだ。こういうことに関するあの男の才覚は、もう悪魔的だ。その気になれば、人をチェスの駒のように扱える……そして一番不憫なのは、紅葉だった。あの子には父に抵抗するなど、思いも寄らないことだ。そればかりか、あいつはほとんど会ったこともない父親のことを未だにろくに知らず、それなのに、漠然と憧れを抱いている。言っても聞かないのだ。ろくでなしの父親を、立派な人物だと思いきんんでいる。いつか会いたい、そのうち会ってくれる、と思って、連絡が来るのを待っているのだ。あの子は文章を書くのも苦手だから、手紙を出すことも出来ない。ただ待つしかない。まだ待っている。あの男は紅葉のことなんか、もう半ば忘れているというのに。私は紅葉に、何もしてやることが出来ない。私はそれが悔しくて仕方がないのだ。どうすればいい？　私は、どうすればいいのだ？　私が言っていることは、間違っているか？」

伊吹は一気呵成にそう言った。

見開いた眼からは、自分でも気づかないうちにいつの間にか涙がこぼれていた。人前で泣いたことなど、もう何年もないというのに。

声がかきやくり上げることすらなかった。ただぼろぼろと、涙が目からあふれ出ると、鼻を伝い頬を流れ、石畳に落ちていった。

伊吹の中には、悲しいとか腹立たしいとかいう単純な感情は、今は見あたらなかった。そうした様々な感情が一度に絡み合い混ざり合って、一つの大きなうねりになり、伊吹の心を強く動かしていた。なぜ、あんなとこ

ろで少し父親の名前を出されただけでここまで自分が動じているのか、伊吹自身にもよく分からなかった。何かトリガーが外されでもしたかのよう
に、もう何ヶ月も伊吹の中に溜まっていた全てのものが、一度に吹き出し
ていった。

吉野はしばらくの間、黙って伊吹の話を聞いていた。
が、やがて少しずつ伊吹の側へ近付いてくると、伊吹の髪を手で優しく
撫でた。伊吹は珍しく、されるがままに、大人しくしていた。
それから――。

吉野は、伊吹の背に手を回すと、そっと抱き寄せた。

伊吹は抵抗せず、顔を吉野の胸に押しつけて、じっとしていた。
吉野の汗の匂いを感じるうち、少しずつ、気持ちは治まっていった。
竹林はまた風に吹かれ、伊吹はそっと目を瞑る。
心地よかった。

*

その心地よさのおかげで――。

伊吹は、再びどこからか自分へ向けられている視線に、気づかないまま
だった。

5.

――どうしてあの時、あんなに腹が立ってしまったのだろう。

そう考えながら伊吹は、ぼんやりと家の玄関の戸を開いた。

「……たがいま」

「まー」

すうくんと一緒にそう言いながら、土間で靴を脱いでいても、伊吹はま
だずっと考え込んでいた。久々に思い切り泣いたおかげで身体が心地よい
倦怠感に包まれており、溜まっていたストレスも、涙と一緒に流れでてし

まったような気がした。けれど、自分の突然の激昂の原因は、よく分からないままだった。胸が中途半端にモヤモヤする。

おまけに。

抱きしめられた感触が、まだ身体に残っていた。

その後の吉野の言葉が、耳から離れない。

——ああ。

——どうしてああいうことを言うのだ。

伊吹は一人、頭を抱えた。

「やはー。おはよー、いぶきちゃーん」

すると、叔母の紀乃が家の奥からのそのそと出てきて、出迎えてくれた。

あの後帰りにまた眼鏡屋に寄って品を受け取って来たため、現在の時刻はおよそ午後三時半だったが、見る限り紀乃は言葉の通り、今起きたばかりのようだった。ウェーブのかかった髪をバレッタで雑に留めており、寝癖がひどい。この家の女性らしく、顔立ちは色気のある美人なのに、全く宝の持ち腐れだった。紀乃は頭を掻く。

「えへへー、ダメ人間ですどうも〜」

「……ネトゲか」

伊吹が半目になって見据えると、紀乃は、いにや〜仕方ないんだって、と手を振りながら、訳の分からない返事をした。

「もはやあたしの人生の大半は『アトランティス』に注がれてるのじやつて。もう七賢者に入ったのだよん。尊崇の対象。MMOはのめり込むと怖いにやー」

「意味が分からん」

酔っぱらいのようなとろんとした眼をした叔母に、伊吹は冷めた眼差しを送った。『アトランティス』というのは世界規模で展開されているネットゲームの名前で、伊吹のアメリカの知人も何人か遊んでいた。もちろん伊吹は興味がない。紀乃はこれでも今年で二十九のはずなのだが、外見上は出来の悪い大学生ぐらいにしか見えなかった。

「ほんで、すうくんは大丈夫になったによ？」

「ん？ ああ。保護者が見つかるまでは、うちで育てていいことになった」

「たー！」

すうくんは嬉しそうに言って手を挙げる。おーよく喋るようになったじやーん、と紀乃はその小さな手を取って、にぎにぎといじっていた。

その時ふと、紀乃は伊吹の方を見る。

「ありえ？ いぶきちゃんどうかしたの？」

「え？」

「眼の周りが赤いよん。泣いた？」

にやまりと眼を細めた叔母に、慌てて伊吹は顔をそらす。久しく泣いたりしていなかったたので、自分の顔がどうなっているか考えていなかった。

一方、無駄に陽気でヘンに目敏い叔母は、訳知り顔で滔々と語り出す。

「いひやーでも、涙を流すっていうのは大事なことなんだよつ。恥ずかしがることないって。いぶきちゃんいつでも気を張ってる感じだからさー。

ここぞつ、って時に泣いておかないと、あとあとしんどいよう。叔母さんなんてもう大人だから、泣きたくても泣けなくてホント……」

「……紀乃はちゃんと仕事してるのか」

とっておきの冷たい声で伊吹がそう言い放つと、途端に紀乃はフリーズした。

「あと前から気になっていたのだが、こんな片田舎で家に引きこもってウエブサービスの個人事業やって、働いてるのは結構なことだが出会いとかあるのか」

「……」

痛いところを徹底して衝かれて叔母が動かなくなったところで、ちょうどよく廊下の向こうから、エプロン姿の紅葉が、ぱたぱたとスリッパを鳴らしてやって来た。

「あ、お姉ちゃん帰ってきたん。今なー、クッキーが焼けたところだなー。

すうくんも一緒に食べ……紀乃ちゃんどうかしたん？ お姉ちゃんも、目え赤いし」

「不徳を重ねていると人間こうなる。放っておいて行くぞ。あと、紅葉……ちよつと話がある」

「あ、うん。何？」

「向こうで話そう」

同じ声音の二人はそう話しながら、廊下をすたすたと歩いていく。すう

くんは彫像のようになった紀乃をしばらく興味深そうに眺めていたが、すぐにクッキーの甘い匂いに惹かれて、伊吹たちの後を楽しそうについでに眺めた。

6.

古寺である賀茂寺の広い敷地の中には、もちろん本堂や鐘楼堂もあるが、尾津野家の建物も幾棟か建っている。今伊吹たちがいるのは、普段生活している母屋で、伊吹と紅葉の寝室の他、祖父母の寝室、曾祖母の部屋、紀乃の部屋などがあった。

匠雄と梨音夫妻、それにみわとほたるの暮らす家は、また別に建ててある。しかし、みわもほたるも普段は母屋に入り浸り、夏休みに入ってから客間に泊まって遊ぶこともしばしばだった。その上、曾祖母の意向で朝食と夕食は毎日二家族全員、母屋で揃って摂ることになっているため、家を分けている意味など実質ほとんどないようなものだった。

その他にも、寺の事務を行うための庫裏、ちよつとした蔵などもある。以前は伊吹も、やたら広い家だ、と思うばかりだったが、宇治川の説明を聞いた後だと納得が出来た。しっかりと必要性があつて建てられた寺だからこそ、この規模なのだろう。

「紀乃ちゃんってずっと家におるけど働いとるんやんなー。なんて言うんやっつけた、広報？」

「S O H Oだ。在宅でオフィスをやっているウェブ関係の自営業者のことを呼ぶ。だが、紀乃がそれに当てはまるかどうかはすこぶる疑わしい」

足早に廊下を歩きながら、伊吹と紅葉はそんな会話をした。すくくんは二人のことを交互に眺めている。

伊吹がなかなか話し出さずにいると、紅葉が先に尋ねた。

「ほんで、お姉ちゃん。何の話なん？」

「ああ、えーっと……まず、今日たまたまあの連続殺人の担当刑事と会った。捜査の状況についての話を改めて聞いたのだが、あの教授の殺害は、恐らく私たちが発見する前の日の夕方から晩にかけて行われたらしい」

伊吹はそう言いながら、台所へ通じる扉を開く。台所には、作業台も兼

ねたテーブルが置いてあるので、紅葉が作る簡単なお菓子は、ここで食べることが多い。すうくんは二人より先に部屋に入り、すぐにクッキーの皿の正面にいそいと腰掛けたが、椅子に座るともう、テーブルの上に顔しか出ない状態だった。

伊吹は椅子を引いて座りながら、話を続ける。

「現場に強い冷房が掛かっていたのは、遺体の腐敗を抑える目的があったようだ。そのせいで、正確な死亡推定時刻が出るのが遅れたという話だった。弟子の宇治川は前日の朝には東京に向けて出ていて、その後は家には教授一人だったはず、だそうだから、誰でも見つからずに入りは出来ただろうな。ただ、それを言っているのは宇治川本人だけだし、しかもその東京の学会というのは次の日、遺体発見当日に開催されていたから、その気になれば教授を殺してから東京へ向かってでも充分間に合うだろう……ん、どうした」

伊吹はふと、紅葉にじいっと見つめられていることに気づいて、顔を上げた。

紅葉は呟く。

「……どしたん、お姉ちゃん」

「ふえ？ 何がだ」

「何かへん。話逸らしてるみたい。そんな事件の話なんか、今まで一回もせえへんだのに」

お菓子食べるんやから、ご遺体の話なんかやめて、と言って、紅葉は紅茶の入ったティーポットを傾け、カップに注いだ。アールグレイの香りが辺りに広がる。すうくんがすすすと鼻をひくつかせて、仔犬のようにそれを嗅いでいた。

「何の話なん？」

「あーいや、だから……」

「あやしーいな〜♪」

妙な節を付けながら紅葉は言い、伊吹とまるきり同じ顔を近づけてくる。ストレスが少ない分紅葉の方が肌が綺麗なのではないか、と伊吹は以前から思っていたのだが、間近で見ると、これといって違いはないようだった。伊吹は目をそらす。珍しく、紅葉の方が優勢だった。

「んー？」

「その……も、紅葉は、あの、す、好きな人とか、出来たこと、あるか？」

「……そら、もう十六歳やし」

あるよ、と当然のように紅葉は言う。慌てた伊吹は、更に尋ねる。

「ま、まさか誰かと付き合ったことは」

「それはないけど。でもええなー、と思った人はおるよ」

「そ、それで、告白とかは！」

「はあ？ 結局……出来へんまんまやったけど……それがどうかしたん？」

お姉ちゃん、様子おかしいよ」

紅葉が訝しげにそう言っても、伊吹は俯いて何も応じないままだった。

実際どこからどう切り出したらよいのか分からない。自分がこんなことになるとは想像もしていなかったし、今も具体的に把握できていなかった。

一体、向こうが何を求めているのか分からない。どう対処してよいのかも分からない。論理的に考えても答えが出ないし、そもそも答えがある問題ではないのかも知れない。しかし、何か返事をしなければならぬことだけは確実だった。すなわち伊吹にとって、想定される範囲で最悪の問題が発生したと言える。とにかく、自分の感覚とか感性とか感情に従って行動する、というのが、大の苦手なのだ。

ううー、とうなって頭を抱えたまま、伊吹はテーブルに突っ伏してしま

った。

「……お姉ちゃん、ほんま大丈夫？」

「……告白された」

「は？」

紅葉がぼかんと口を開けると同時に、伊吹は顔を上げて叫んだ。

「あの吉野秀一にだ！ 私はどうすればいい！」

「吉野くん!? お、お姉ちゃん、落ち着いて……」

*

「……尾津野って、誰か付き合ってるヤツとか、いないよな」

「はあ？ 何を言っているのだ」

さんざ涙を吉野のシャツに付けてから、赤くなった顔を上げた伊吹は神社の境内で、裏返った声を上げた。鼻がつん、と痛かった。何だかこれまで感じたことのない、ぼやけた曖昧な感覚が胸の中で拡散していた。身体の中に、霧が籠もっているような感じがする。

「いるように見えるか」

「見えないな。だから訊いたんだけどな。んじゃあ……俺と付き合わないか？」

ハンカチを取り出して、手水場の水で濡らそうとしていた伊吹は、ゆくりと振り返った。

「……は？」

見ると吉野は、冗談でも言ったかのような悪戯っぽい眼をしていた。

*

「……ああもうどうしてああいうことを唐突に言うのだ。大体今日は途中から調子がおかしかった。突然癩癩を起こしてしまうし、何の間違いか吉野相手に長々と愚痴ってしまうし、気づいたらその何というか妙なことになるってしまうし、かと思ったら付き合うだなんだと言い出すし……前からカワイイと思っていたとかそんな取って付けたようなこと言われても私はどう反応したらよいのか分からないではないか！」

「お姉ちゃん、すうくんビククリしてる」

動物でもなだめるような調子で紅葉にそう言われてやっと我に返った伊吹は、すうくんの顔を見る。口元からクッキーをぽろぽろとこぼしながら、すうくんはパニックを起こしている伊吹を、まるで紙芝居でも見ているよくなぼうつとした目つきで眺めていた。

あたふたしながら、紅葉は何やら解説を加えようとする。

「えと、そういうのなんて言うんやったっけ、じょーちよー……」

「情緒不安定か。ああそうだ。夏休みに入ってから、四月のようにまた精神が揺れ動かされてばかりだ。ほんの三四日の間に色んなことが起きすぎている。どうしてこんなことに……あ、ところでもしかして、お前の好きだった人ってまさか」

「ふえ？ いやちやうちやう、吉野くんちやうよ。全然違う人。吉野くんあんまりタイプと違うし……お姉ちゃんの方こそどうなん？ 鬼のこと調べるとかお誘いに乗っとつたし、気になってたんと違うの？」

「何がだ。まさか。全然。そんなこと。ありえない。無茶苦茶だ。絶対ない」

大急ぎで伊吹は否定する。少なくとも伊吹としては、自分の中にそのような感情を認識したことはただの一度もなかった。しかし、考えてみれば生まれてこの方「そのような感情」というものを知ったことがない以上、どうやって認識したらよいのかも分からない。一体世間の人々はいかにして「そのような感情」を学ぶのだろうか。伊吹の想像を超えている。

「ほんで……返事はしたん？」

「いやその、唐突に言われたので返事が出来ない状態になってしまっ、そのまま……」

隣ではすうくんが、山盛りあつたはずのクッキーを一人で全部食べ尽くそうとしている。しかし伊吹も紅葉もそれどころではない。紅葉が訊いてくれるまま、伊吹はついするすると引き出されるようにして、どんな風に告白されたかを延々と話してしまった。父親の話にかつとなって駆けだした、というくだけは紅葉には伏せざるを得なかったので、少々曖昧な話になってしまう。それでも紅葉は気にせず、優しく受け止めてくれた。

ようやく話し終わると、伊吹は冷めた紅茶を飲んだ。

「……そ、そういう感じなのだ。どうすればいい」

「んー、どうもせんでええんと違う？」

紅葉はあっさりと言う。伊吹は激しく困惑した。

「ど、どうにもって、そういうわけにはいかないだろう」

「せやけど、お姉ちゃんどうしたらええか分からんのやろ？ せやったら、今はまだ無理に返事せんでもええんとちやう？ 吉野くんもそう言うてるやん」

確かに吉野は、返事とかは気が向いてからでいい、と軽い調子で言っていた。別にOKだろうとダメだろうと態度は変わらないから、気にしないでくれ、とも。しかし伊吹としては、そういうわけにはいかない。問いを向けられたからにはそれに答えなければならぬはずである。

「そういうもんとちやうって」

紅葉は朗らかに笑う。

「算数の問題とちやうんやから。答えなんか出さんでええやん」

「し……かし……」

「ええの。流れるままに流しといたら。上手いこといかんだらそれまでのことやし、上手いこといったらそれはそれでええし。そうと違う？」

クッキーを食べ終えて、会話を聞くのにも飽きてきたらしいすうくんは、ひよいと椅子から飛び降りて、とこと寺の裏の林に面した窓の方へと歩いていった。

「流れるままって……どうやって流したらいいのだ。せめてそれだけでも教えてくれ」

「せやからー。もーお姉ちゃん頭固いわー。流すんと違って、放っておいたら流れていくの。そういうもんやん。上手く行く正解なんてないし、逆に言うたらどうなっても正解やし。それでええやん。何があかんの？」

「いや、しかし……その」

まだうじうじとしている伊吹に苦笑すると、紅葉は立ち上がってクッキーの皿を手取る。

そして、もーすうくんみんな食べてしもたん、と言いながら、窓際のすうくんの元へ歩いていった。すうくんはさつきから真剣な眼差しで、家の外の林を見つめている。

「何見とんの？」

少し腰を落とすと、紅葉も一緒になって外を覗く。

「……えっ!？」

何かを見て声を上げた紅葉は、クッキーの大皿を取り落とした。

大きな音を立てて、皿が碎ける。

「なんだ！ どうしたのだ紅葉」

驚いた伊吹は席を立ち、急いで紅葉のそばへ駆け寄った。

そして、窓の外を見る。

雑木林の中には――。

異様に大きな身体をした毛むくじやらの、一本脚の何かが立っていた。

大柄なそれは、じつ、とこちらを見ている。
顔には眼が、一つしかなかった。

ふと気づくと、それは飛び跳ねながら、林の奥へと姿を消していった。
まだ明るい昼日中、暖かに日の射した夏の雑木林で、そのぴよんぴよんと
跳ぶ姿はひとときわ奇怪で、嫌悪感を催させた。

伊吹も紅葉も何も言わず、窓外を向いて、立ちつくしていた。
すうくんは、まっすぐな眼で遠方を見据えている。